

Think globally, Act locally

2023 Korea

文部科学省委託 令和5年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム
(日韓教職員対話プログラム)

実施報告書



文部科学省委託 令和5年度 新時代の教育のための国際協働プログラム

初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム (日韓教職員対話プログラム)

実施報告書

ソウル、京畿道(坡州市・漣川郡)

事前研修： 2023年7月8日(土)

プログラム：2023年7月15日(土) - 2023年7月21日(金)

事後研修： 2023年8月26日(土)・2024年1月27日(土)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人近くの教職員を海外に派遣してきました。これにより日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日韓間の国際交流事業としては、ACCU がユネスコの信託基金をもとに韓国ユネスコ国内委員会の協力により「韓国教職員招へいプログラム」として 2000 年度と 2001 年度に韓国より毎年 50 人の教職員を招へいしたのを皮切りに、このプログラムと対をなすものとして、2003 年度から日本教職員の韓国への派遣プログラムが始まりました。以降国際連合大学が 2002 年度から 2017 年度まで主催した「国際教育交流事業」のプログラムを、2018 年度からは文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」として実施し、これまでに 3 千人以上の日韓教職員がお互いの国を訪問しました。

今年度は、文部科学省委託「令和 5 年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム(日韓教職員対話プログラム)」を 2023 年 7 月の韓国現地での対面形式と事前事後研修としてのオンライン形式による両形式で実施しました。

参加者は各地域の学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題や日韓両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員や児童生徒との交流を図ることができました。このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のさらなる発展の一助となるよう願っております。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国教育部、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2024 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

1. プログラム概要	3
2. 実施内容・訪問記録	13
3. 成果と今後への活用	27
付録	57
過去のプログラム実績	58
プログラム写真	59

1. プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、ユネスコ (UNESCO: 国際連合教育科学文化機関) の理念に沿って、多様な文化が尊重される平和な社会の実現をめざし 1971 年に設立され、教育と文化の分野においてアジア・太平洋地域の人々と協働して事業を推進してきました。2001 年からは、子どもたちに影響力をもつ学校の教職員を対象にした国際交流事業を開始し、「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」づくりを担っています。

日本と韓国との国際交流事業に関しては、文部科学省の協力のもとで、韓国から教職員を招へいする「韓国教職員招へいプログラム」を 2001 年より実施し、日本教職員を韓国に派遣するプログラムを 2003 年より文部科学省および国際連合大学の協力のもとで実施してきました。これらの一連の事業は韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国教育部の協力のもと韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU) により「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム」が実施されています。これらの事業により、これまでに合わせて 3 千人以上の日韓の教職員が海を渡り、新型コロナウイルス感染症拡大以降も、オンライン上での交流を継続してきました。今年度は 4 年ぶりの現地での対面形式の交流とオンライン形式の事前事後のセッションを組み合わせたハイブリッド型のプログラムを実施しました。

今年度のプログラムは韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU) の招へいにより、文部科学省委託「新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業」の一環で実施しました。

2. 目的・期待される成果

本プログラムは、日本の教職員を韓国に派遣し、韓国の教育・文化施設を訪問し、韓国の教職員や児童・生徒との交流を通じて、教職員が相手国に対する理解を深めるとともに、お互いに学び合い、教職員や生徒との相互理解と友好を促進し、教職員間のネットワークを構築・強化することを目的としています。特に参加者は韓国のユネスコスクールを含む学校およびコミュニティにおける持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) および地球市民教育 (GCED: Global Citizenship Education) の分野における効果的な実践を探求すること・日韓の教職員間のネットワーク構築を強化すること・東アジア地域における平和の文化の実現に貢献することが期待されています。

また、帰国後には、教職員が自身の学びを教育現場において児童・生徒・教職員・地域住民等に伝え、ESD や GCED を含む国際理解・国際交流を推進する担い手となり、ひいては日韓間の相互理解と友好の促進、そして平和で持続可能な世界の実現に繋げることが期待されています。

3. 活動内容

- 1) 現在の韓国の教育政策や課題についての講義受講
- 2) 韓国教職員との交流
- 3) ユネスコスクール訪問(授業見学・持続可能なコミュニティ作りのための ESD や GCED の活用方法の視察等)
- 4) 文化遺産や一般家庭の訪問を通じた韓国文化の特色に対する理解増進

4. 日程

事前研修(オンライン)：2023年7月8日(土)

プログラム：2023年7月15日(土)～7月21日(金)(7日間)

事後研修(オンライン)：2023年8月26日(土)・2024年1月27日(土)

事前研修(オンライン)

日付	日程	形式	活動
7月8日(土)	事前	オンライン	<ul style="list-style-type: none">・オリエンテーション・韓国の教育事情に関する講義・参加者間の自己紹介・事務連絡・質疑応答

プログラム

日付	日程	訪問先	活動
7月15日(土)	前日	羽田	<ul style="list-style-type: none">・出発前オリエンテーション
7月16日(日)	第1日目	羽田、ソウル	<ul style="list-style-type: none">・ソウル到着・現地オリエンテーション・韓国におけるユネスコとユネスコスクールの活動についての紹介・講義
7月17日(月)	第2日目	ソウル	<ul style="list-style-type: none">・開会式・韓国の教育についての講義・ワークショップ・宗廟訪問(ユネスコ世界文化遺産)・歓迎晩餐会
7月18日(火)	第3日目	ソウル	<ul style="list-style-type: none">・ソウル文星小学校への訪問・プログラム振り返り・ホームビジット
7月19日(水)	第4日目	京畿道 (坡州市など)	<ul style="list-style-type: none">・生態環境の見学・訪問・文山水億高校への訪問
7月20日(木)	第5日目	京畿道 (漣川郡など)	<ul style="list-style-type: none">・ユネスコ世界ジオパーク訪問・報告会・送別晩餐会
7月21日(金)	第6日目	ソウル、羽田/関西	<ul style="list-style-type: none">・帰国準備・帰国(羽田空港/関西国際空港へ)

事後研修(オンライン)

日付	日程	形式	活動
8月26日(土)	事後	オンライン	・現地での経験の振り返り ・活動経験の還元について共有
2024年 1月27日(土)			・帰国後の活動の共有 ・今後に向けての活動の共有

5.参加者

下記の教職員・随行者併せて30名を参加者とする。

- 1) 公募により選抜された教職員もしくは教育行政職員
- 2) 日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

6.参加資格

- 1) 日本の初等中等学校または特別支援学校の教職員もしくは教育行政職員であること
- 2) 国際交流・国際理解教育・ESD・GCED・等の活動に携わっている、または高い関心を持っていること
- 3) 自らの教育経験を共有する韓国の教職員と積極的に交流をする強い意志があること
- 4) プログラムに対しての目的意識を事前に強く持った上で帰国後にプログラムの経験を活かして国際交流・国際理解教育・ESD・GCED等の推進に寄与できる者
- 5) 全てのプログラム活動に参加できる健康状態であること
- 6) 過去に本プログラム(対面形式での韓国政府日本教職員招へいプログラム)への参加が無いこと
- 7) 日本国籍であること

7.渡航費等諸経費

- 1) 韓国ユネスコ国内委員会が以下について負担する。
 - ・往復航空運賃：日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
 - ・公式行事に係る韓国内の交通費
 - ・宿泊と食事：韓国滞在中の全ての食事が手配される。但し、公式行事のない日の夕食については、支給される食費（1食当たり20,000ウォン(約2,000円)）から参加者が支出することとする。
- 2) ACCU が以下について負担する。
 - ・日本国内の交通費：オリエンテーション日の自宅最寄り駅から会場までの交通費、および帰国日の到着空港からの自宅最寄り駅までの交通費（ACCUの規定に準ずる）
 - ・事前オリエンテーション日：(7月15日)の宿泊
 - 注1：オリエンテーション開始までに到着可能な交通手段がない場合、前日の宿泊費を支給する。
 - 注2：帰国日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り帰国当日の宿泊費を支給する。
 - 注3：本プログラムは公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先での負担とし、ACCUからは支給しない。

3) 各参加者は下記について負担する。

- ・海外旅行損害保険：各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
- ・上記(1)、(2)以外の諸経費

4) 旅券と査証について

旅券（パスポート）：入国時に3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。

査証（ビザ）：一般旅券の場合はビザの取得は不要。

8. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

プログラム日程

事前研修(オンライン)

日にち	時間	内容
7/8(月)	13:00-13:15	開会挨拶 ・文部科学省 大臣官房国際課長 北山浩士 ・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部長 進藤由美
	13:15-13:25	プログラムの目的について
	13:25-14:25	講義「韓国の教育政策・教育事情」(講義40分、質疑応答20分) 文部科学省 総合教育政策局 調査企画課 外国調査係 田中光晴
	14:25-14:35	休憩
	14:35-15:45	参加者の自己紹介セッション
	15:45-16:00	質疑応答
	16:00	終了

現地研修(前日の出発オリエンテーション含む)

日にち	時間	内容
7/15(土)	14:40-14:55	オリエンテーション受付
	15:00-17:30	オリエンテーション、ホテルチェックイン
	18:30-20:00	懇親会
7/16(日)	09:20	羽田空港出発(KE2106)
	11:45	金浦国際空港到着
	13:00	昼食
	15:00-15:20	歓迎の言葉 プログラムオリエンテーション
	16:15-17:15	講義：平和の砦を築いてきた日韓歴史教師たちの協力と友情 講演者：パク・ソンギ 河南高校(ユネスコスクール)教諭／韓日歴史教師交流会会長
	17:15-17:30	休憩
	17:30	夕食
7/17(月)	9:30-10:00	開会式
	10:00-10:30	講義：韓国の教育の現状と主な課題 講義者：キム・ギヒョン 韓国教育部 グローバル教育政策担当官 事務官

	10:30-10:40	休憩
	10:40-12:30	ワークショップ ①テーマ： ユネスコ登録遺産を活用した世界市民教育 講演者： キム・ウォンホ（ウォンファ中学校教諭） イ・ソンヨン（ゴンジウム中学校教諭） ②テーマ 韓国の端午の節句に関する本づくり
	12:30-14:00	昼食
	14:00-14:30	移動
	15:00-16:30	宗廟訪問(ユネスコ世界文化遺産)
	16:30-17:30	移動及び休憩
	17:30-19:30	歓迎晚餐会
7/18(火)	09:00	ホテル出発
	9:50-13:30	ソウル文星小学校 (Seoul Munsung Elementary School:ユネスコスクール)訪問 昼食：給食
	13:30-14:30	ホテルに移動
	14:30-15:30	プログラム振り返りミーティング
	15:30-16:00	休憩
	16:00-16:30	ホームビジットオリエンテーション
	16:30-21:00	ホームビジット
	21:00	ホテル到着
7/19(水)	8:00	ホテル出発
	9:30-11:30	非武装地帯(DMZ:Demilitarized Zone)における生態環境の見学・訪問 朝鮮半島の分断状況と DMZ の生態についての説明
	11:50-12:40	昼食
	13:00-16:00	文山水億高校(Munsan Sueok High School:ユネスコスクール)訪問
	16:00-17:30	ホテルに移動
	17:30	ホテル到着
7/20(木)	8:00	ホテル出発
	10:00-14:00	生物圏保全地域/ユネスコ世界ジオパーク/文化センター訪問(昼食含む)
	14:00-16:00	ホテルに移動
	16:00	ホテル到着
	17:00-18:00	報告会・閉会式
	18:00-20:00	送別晚餐会
7/21(月)	6:30	金浦国際空港へ移動
		金浦国際空港到着 2 路線に分かれて帰国 金浦～関西 KE2117 9:00-10:45 金浦～羽田 KE2101 9:00-11:10

参加者リスト ※両グループとも、所属・職名は当時のまま掲載している。

No.	氏名	所属	職名	担当係
1	岩田智文	愛知県江南市立古知野南小学校	教諭	記録
2	郡守彦	神戸市立義務教育学校八多学園	主幹教諭	報告会
3	米山知里	埼玉県立浦和第一女子高等学校	教諭	会議進行
4	加茂篤思	登米市立加賀野小学校	教諭	出し物
5	河野大樹	大分県立大分上野丘高等学校	教諭	記録
6	嶋田拓哉	千葉県立松戸国際高等学校	教諭	写真
7	夏子史和	野洲市立中主小学校	教諭	記録
8	根岸一成	宮城県加美農業高等学校	校長	団長
9	藤井美香	上越市立東本町小学校 (上越教育大学教職大学院)	教諭	記録
10	小川亮	北九州市立門司中学校	教諭 特別支援教育コー ディネーター	会議進行
11	津曲康夫	宮崎県門川町立草川小学校	指導教諭	庶務
12	都倉さゆり	神戸市立湊小学校	教諭	出し物
13	津嶋大樹	宮崎県立延岡高等学校	教諭	記録
14	岡田つぐみ	千葉県立東葛飾中学校	教諭	報告会
15	坂井琢雄	新潟市立内野中学校	教諭	記録
16	仁木淳浩	豊田市立美里中学校	教諭	記録
17	行場二千佳	登米市立佐沼小学校	教諭	写真
18	富山正美	茨城県立並木中等教育学校	教諭	副団長
19	平澤香織	横浜市立東高等学校	教諭	記念品
20	橋本真里	愛西市立立田北部小学校	教諭	記録
21	皿海優子	神戸市立竜が台中学校	教諭	記録
22	大野綾華	八千代市立高津中学校	養護教諭	記念品
23	山本希鈴	箕面こどもの森学園	教諭	記録
24	高崎智里	兵庫県立宝塚西高校	教諭	記録
25	片桐庸至	八千代市教育委員会	主任主事	記録
26	前田良隆	大阪府教育庁	総括主任指導主事	写真
27	勝馬あずさ	沖縄県立大平特別支援学校	教諭	報告書
28	野内瑛里	文部科学省	係員	
29	伊藤妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	主任	
30	杉戸卓磨	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	事務専門員	

プログラム関係機関

< 日本側機関 >

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

駐大韓民国日本国大使館/Embassy of Japan in Korea

< 韓国側機関 >

韓国教育部/Ministry of Education, Republic of Korea

韓国ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

駐日本国大韓民国大使館/Embassy of the Republic of Korea in Japan

< 訪問校 >

ソウル文星小学校/Seoul Munsung Elementary School

文山水億高校/Munsan Sueok High School

< 企画・実施・運営 >

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

2. 実施内容・訪問記録

7月8日（土）事前オリエンテーション（オンライン）



講義の様子

7月8日(土)、オンラインで事前オリエンテーションが行われた。オリエンテーションでは文部科学省田中光晴氏による「韓国の教育事情」に関する講義が実施された。その後、グループ自己紹介で参加者の顔合わせと訪問に際しての質疑応答を行い、情報の共有を行った。講義においては韓国と日本の教育について共通点と相違点を学び、実際に訪韓し知識を深める意欲が高まった。オリエンテーション全体を通して、「『出会う』を大切にすること」や「学びや気付きは参加者次第であること」、「ネットワークの構築と継続的な交流を目指すこと」など、本プログラムに参加することの目的や重要な視点を参加者全員が共通認識として持つことができた。

講義「韓国の教育事情」Q&A（抜粋）

Q：韓国の教育現場における ICT 環境はどのような状況か？

A：高速 LAN も含めたインフラはすでに整っており、教育支援システムは全国で統一されている。その成果もありコロナ禍ではオンライン教育がスムーズに行えた。

Q：韓国の教科書についてはどのような制度があるのか？

A：検定制となっており、教科書の採用は各学校が決定する。

Q：日本に比べると韓国の方が英語教育が盛んと感じるのはなぜか？

A：大学で留学経験をしている親が多く、親が英語を話せると子供も意識を高く持つ。また家庭での英語に触れる機会が多い。言語的に母音が少ない・漢字などがなく語学の学習に抵抗が少ない・親戚に海外生活者が多いなどの要因もある。

7月15日（土）出発前オリエンテーション（羽田）



グループワークを行う参加者たち

韓国出発の前日に一堂に集まった参加者は出発前オリエンテーションに参加をした。オリエンテーションでは注意事項の連絡を受けるとともに、プログラムでの目標をグループに分かれて共有するなどの活動を行い、いよいよ始まる現地でのプログラムに向けて意識を高めていった。また現地での歓迎晩餐会で披露をする歌の練習についても全員で協力をして行った。

7月16日（日）オリエンテーション・講義（ソウル）



「平和の砦を築く韓日歴史教師の出会い」講義を聴講する日本教職員

プログラムの初日、韓国ソウルのプレジデントホテルにてKNCU主催によるプログラムのオリエンテーションが実施された。

オリエンテーションではプログラム日程、韓国におけるユネスコとユネスコスクールの活動について説明を受けた。説明を通じてユネスコ憲章前文「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」の精神を参加者で共有することができた。

また河南高校パク・ソング教諭による講義「平和の砦を築く韓日歴史教師の出会い」が行われた。日本との間の正しい歴史認識の構築を実践するに至るまでの過程や日本の歴史教育者協議会との交流の中で「向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史」の出版に至るまでの人的交流についての紹介があった。また独仏関係の改善を引用しつつ、平和構築に向けて歴史事実は受け止め、未来に行動するために交流を継続することを使命として活動していく旨が強調された。「歴史は過去をのみ扱うのではなく、未来をこそ考えるために必要である」という言葉が印象的であった。

7月17日（月）開会式・講義（ソウル）

開会式においてはハン・ギョング韓国ユネスコ国内委員会事務総長、キム・キヒョン韓国教育部 国際教育協力担当官事務官、山本剛在大韓民国日本国大使館一等書記官より挨拶があった。本プログラムは、コロナ禍でもオンラインで実施しこれまで 23 年間途切れることなく続けられ、今回 4 年ぶりに対面での実施であることに言及があった上で、変動の激しい社会における様々な教育課題を共有する両国の教育職員の交流の重要性が強調された。また根岸一成 訪問団長は挨拶において子どもたちに大きな影響を与える教員という立場を踏まえて、韓国での学びを帰国後に子どもたちに伝えていくことの責任の重要性に触れると共に、両国の更なる友情の深まりのためにどのような努力も惜しまないという訪問団全体の決意の念を述べた。改めて訪問団は本プログラムの意義深さと関係各所への感謝の念を抱いた。

その後の講義においてはキム・キヒョン韓国教育部国際教育協力担当官事務官より、「韓国教育の現況と主な懸案」をテーマに 2023 年 4 月に発表された 3 大教育改革を中心に講義を受けた。世界最高水準の国家責任政策としてのドルボム(子どもケア)、AI デジタル教科書を用いたオーダーメイド教育の実現、新たな社会ニーズに適した大学改革など様々な韓国の教育事情や今後の課題について学ぶ機会を得た。



『韓国教育の現況と主な懸案』に関する講義の様子



講義に対して質問をする参加者

講義「韓国教育の現況と主な懸案」Q&A（抜粋）

Q：日本においては教師の労働環境についての課題があるが、韓国ではどうか？

A：(同席をしていた韓国教員からの回答)

現在の状態でも韓国の教師は日々の業務量が多く、負担を感じている。新しい実践は好ましいが、新たな負担が増えるという部分では現実的でない。スタッフの数を増やすなどの対応が必要と感じている。

7月17日（月）ワークショップ

講義の後は2つのワークショップが実施された。最初のワークショップのテーマは「ユネスコ登録遺産を活用した世界市民教育」である。ウォンファ中学校キム・ウォンホ教諭より、ユネスコ登録遺産を活用した世界市民教育に関する説明と教材の紹介があった。「教育は全てのものに価値を与える」という信念を基盤にして、「世界遺産」について生徒にどのように関心を抱かせるか、教師にどう活用してもらうかなど悩みを抱えながら世界市民教育に関する学習教材の開発に取り組んでいるということを学んだ。全体的な狙いとしては遺産をただ保存して守ることよりも遺産がもたらす価値に焦点を当てた学習ができるような教材の開発に努めたということだった。その中で「『遺産』とは何なのか？それはただ守るだけのものではなくて一緒につくっていくものである。ただの観光地ではなくて、日常の中に溶け込んでいるものである」という点を伝えることを意図したとのことだった。「遺産を通して過去を知り、現在を通して未来を切り開く」という言葉を聞き、遺産を通して自分自身を見つめ直す機会を作ることができるかと知る事ができた。

その後はゴンジウム中学校のイ・ソンヨン教諭より、端午をテーマとした授業実践を紹介していただき、韓日両教職員によるグループで実際の活動を体験するワークショップを行った。本授業の実践には2005年に韓国で江陵端午祭がユネスコ無形文化遺産として登録されたことをきっかけに、韓国と中国でどちらが端午の元祖なのかについて論争が始まったことが背景にある。本授業はそのような状況において4カ国の端午を学ぶことを通じて生徒に多面的な視点を伝えるために実践された授業であった。4カ国の端午について4つのテーマで構成された三角本を作り、ギャラリーウォークで互いの情報を共有した後、うちわやドラゴンボート、鯉のぼりを工作するジャンプ課題に取り組むというのが授業の流れで、ワークショップでは限られた時間ではあったが、その流れを体験することで理解を深めることができた。また実際にこの授業を実践した際には授業前まで子どもたちはこの端午についてよく知らなかったが、4カ国の端午について調査をして他国の文化について理解するきっかけとなり、これは大きな目で見れば、平和の流れにもつながるという実感を得たとのことだった。

本講義とワークショップを通して、文化は互いに影響し合うことで多様で豊かになること、理解しようと努めれば確執や誤解も平和と相互理解のきっかけになり得ることを学ぶことができた。



『ユネスコ登録遺産を活用した世界市民教育』に関する講義の様子



グループワークで課題を行う両国の参加者たち

7月17日（月）宗廟(ユネスコ世界文化遺産)訪問



見学する参加者たち

外大門を抜けて、敷地内に入ると、目の前には広大な敷地が広がっていた。宗廟は儒教思想に基づいて造られており、厳かな雰囲気からすぐに神聖な場所であることが伝わってきた。永寧殿は正殿よりは小さく、装飾も少ない様子から神聖な雰囲気が際立つ空間と建物だと感じ、参加者は建物前に広がる石畳空間に入って永寧殿に礼をしたり、石畳に腰を下ろしたりして祭礼の様子を想像していた。その後、修復工事中の正殿に向かった。位牌の数が増えると増築していくことから、東西に延びていく独特の形式となっていた。参加者は世界遺産の修復作業を見学するのは初めての経験であり、どの参加者も興味深く観察していた。瓦が剥がされた屋根部分は垂木がむき出しの状態になっており、劣化や破損している箇所は修復が施されていた。新しい素材の材料が使用されるのではなく、以前から使用されていたものを修復していく作業から、職人の方々の技術の高さがうかがえた。以上の様子から宗廟を訪れることで、韓国の歴史を肌で感じることができとても興味深い経験となった。また修復作業を見学する貴重な体験から日本の文化財を保護する大切さも学ぶことができた。

7月17日（月）歓迎晩餐会



晩餐会にて一緒に歌を歌う両国の参加者

歓迎晩餐会では 20 年以上続く韓国政府日本教職員招聘プログラムの歩みを振り返り、各関係者からの挨拶があった。コロナの影響から 4 年ぶりに韓国を訪れることができた今回の訪問は非常に貴重な研修であり、嬉しいものであることが伝わってきた。両国の参加者の交流は大いに盛り上がり、日本教職員の公演として「世界に一つだけの花」「アリラン」を歌い、韓国と日本の絆が深まる瞬間を体験した。参加者一同は、これから始まる研修プログラムへの期待と日本を代表して学ぶ意欲に溢れていた。

7月18日（火）ソウル文星小学校訪問（ソウル）

訪問スケジュール

9:40	学校到着
9:50 - 10:30	歓迎行事・学校紹介
10:40 - 11:20	日本教職員による授業
11:30 - 12:10	学校ツアーのご案内
12:10 - 13:00	昼食
13:00 - 13:30	教職員交流
12:30	記念撮影



日本教職員による韓国の児童への授業

学校・機関の特色

計24クラスで運営されている小学校である。各クラス当たりの生徒数は19人であり、海外をルーツに持つ児童も多い。学校全体としては40%程度そのようなバックグラウンドを持つ児童がおり、特に1年生では60%を超えている。

ユネスコの価値教育と世界市民教育の実践を根幹として教育を行なっている学校であり、教訓として「一生懸命」・「強く」・「正しく」・「したたかに」を掲げている。

特色として主に「非暴力・平和教育」、「文化多様性理解教育」、「生態環境教育」などを通じて、思いやりや尊重の精神、お互い考え方が違うことを前提にした共同の価値観を育み、多文化を乗り越えた世界市民の育成に取り組んでいる。また、一般の教育活動もユネスコ活動に密接に関連させた教育を徹底している学校である。

当日の活動の詳細・参加者の感想

最初の学校紹介の後は訪韓した日本教職員が4つのグループ（2年生、4年生、5年生、6年生）に分かれ、それぞれのクラスで「日本の伝統的な遊び」を紹介する授業を行った。各グループで事前に準備や打ち合わせを行い、韓国の小学生に日本の伝統的な遊びを正確に伝え、同時に韓国の生徒が抱えている質問に答えられるよう準備をしてきた。どのグループの児童も日本の教職員や日本文化を受け入れ、本当に楽しんでくれている様子が伝わり、子どもの無邪気さや新しい知識への興味・関心（好奇心）は全世界共通であると改めて実感することができた。韓国の児童、日本の児童などと区別するのではなく、みんな地球に住む児童、子どもたちであると認識する新たな視点が得られたことに大変感謝している。

授業の後は、学校内の見学ツアーをして頂き、2グループに分かれて校内を巡回した。日本の小学校と比較して、児童が過ごしやすく学びやすいような雰囲気を生み出す工夫がなされていると感じた。昼食には児童と同じ給食メニューとしてビビンバを頂き、雰囲気も肌で感じ味わうことができた。

7月18日（火）振り返りミーティング（ソウル）



ミーティングの様子

小学校での授業実践について全体で意見交換を行い、他グループの実践について、その様子や感想も知ることができた。また最終日の報告会の内容についても協議をして発表の後にプログラムを振り返るためのスライドショーを作成して上映することも決まった。

7月18日（火）ホームビジット（ソウル）



訪問した家庭にて



ホームビジットは、日本の教職員が韓国の家庭に招かれ、互いに交流する中で韓国をさらに深く理解するためのプログラムである。まずホームビジットの説明会が開かれた後日本の教職員が2人1組となり、車もしくは地下鉄などの公共交通機関を使ってホストファミリーの家庭を訪問した。訪問先では、夕食をごちそうになったりホストファミリーと話をしたりして、韓国の家庭の様子を直に体験することができた。また、日本から持参した手土産を渡すことで、それぞれの文化を交流する貴重な場ともなった。どの教職員も「もっと交流する時間がほしかった」とホストファミリーと別れを名残惜しんでいた。ホームビジットを通して、「直に体験することの大切さ」や「自分の考えや文化を伝えることの大切さ」を学ぶことができた。

また相互理解を深めるために「お互いが『違う』ことを前提に価値を共有し、『違い』こそ、その人らしさ（その国らしさ）であると認めること」の重要性を感じた。

短い時間ではあったが、互いの心を通わせた有意義な交流ができるプログラムであった。

7月19日（水）DMZ(非武装地帯)生態環境訪問

DMZとは、自国の領土であるにも関わらず、国際法で兵力および軍事施設を駐留させない義務がある特定の地域、または区域を意味する。朝鮮半島のDMZは、1950年6月25日に勃発した韓国戦争が1953年7月27日に停戦協定を結び、休戦したことで生まれた。陸上の軍事境界線であるMDL(Military Demarcation Line)を中心に、南北にそれぞれ2kmずつ両国の軍隊を後退することを約束して作られた地域である。軍事境界線と4kmしか離れていない村には、今も防空壕と武器庫の痕跡があり、10年前に新しく作られた避難所も厚い鉄の扉によって入口が守られている。内部には約207万個の地雷が残っているとされており、通行は実質不可能である。そのため半世紀以上にわたって人の寄り付かない場所となった。そしてDMZは準緑地を形成し、韓半島の貴重な野生動植物の生息地へと変化する。この地域には、金剛提灯花など10種以上の韓国の特産植物を含めて、1千種余りの植物が分布していることが調査された。

内部に入ると人間の手の入っていない自然地帯が広がっていた。DMZ生態研究所所長のキム・スンホ氏の解説によるとDMZ域内では地雷が埋まっていることなどにより人の出入りがないことから、自然環境が保護され、多様な生物多様性がみられるとのことであった。見学した地域一帯にはコンクリートやアスファルトなどの人間が作ったものではなく、植物、丘、石、などで構成された自然が広がっていた。

最後に印象に残ったのは、「この場所は北朝鮮でも韓国でもない、北でも南でもない、生態系を守る国だ」という認識」との解説だった。今まで自然環境や生態系と、地域の政治情勢が関係するという事にまで自分の思考が及んだことがなかったため、この事実を知り、自分の行動範囲を広げることが本当に大切だと感じた。そうすることで新しい気づきを得て、それは今後の自分にも変化を与える。今回はそんな経験が出来たと感じる。



生態環境の様子

7月19日（水）汶山守億高校訪問（京畿道 坡州市漣川郡）

訪問スケジュール

13:00	学校到着
13:15 - 10:30	歓迎行事・学校紹介
13:20 - 13:40	歓迎演奏
13:40 - 15:35	教育実践紹介
15:35 - 16:00	韓国教職員・生徒との交流
16:00	記念撮影・閉会



学校での記念写真

学校・機関の特色

北朝鮮の開城(ケソン)まで20km、ソウルまで60kmという場所に位置しており、都市部にあるような様々な教育資源に恵まれてないという状況を克服するために様々な取り組みを行っている。

例えばユネスコスクールに加盟することで国際的なネットワークを活用して、持続可能な発展(ESD)教育などグローバルな考え方と行動する能力を育む教育に集中している。また人口知能/人文社会/工学系列の融合プロジェクトにも力を入れている。特徴的な教育活動として以下の例が挙げられる。

- AI・平和・芸術・融合世界市民教育プロジェクトの運営
- VRを活用して、気候変動に対応する世界市民の教育を実施

当日の活動の詳細・参加者の感想

開会の辞の後、AIと共同制作を行った世界市民のためのオーケストラを鑑賞し、世界市民教育の具体的な実践発表を聞き、VRを用いた教育プログラムを体験した。学校ではSDGsに対する教育やAI教育など、多岐にわたって未来の地球や子どもたちのための教育を行っていることに感銘を受けた。特にAI技術の活用においては、単に技術の習得だけにとどまらず、そこから平和な世界を築くことや地球環境を守るための活動に繋がっていることに、教育の重要性を改めて感じた。SDGsの教育やAI技術を活用した教育については、設備が充実している様子から、私立校と公立校の違いを感じる部分もあった。韓国国内でも恵まれた環境なのだと感じたが、日本でも同じような課題があるため、子どもたちの教育環境を充実させるために、政府の大きな決断が必要だと感じた。また韓国と北朝鮮との関係についても、他人事ではなく高校生たちが自分事として捉え、それぞれが自分の意見を持ちながらその問題に向き合っていることに感心した。歴史を知ることと同じぐらい、それ以上に未来について希望を持ち、よりよい未来に向けて活動していこうという意欲をまじまじと感じた。

7月20日（木）生物圏保全地域/ユネスコ世界ジオパーク訪問

ア. 漢難江地質公園(世界ジオパーク)

ハタンガンジオパークは、臨津江と漢難江を中心として形成されたジオパークで、2020年に世界ユネスコジオパーク（美的、歴史文化的、生態学的、地質学的な価値がある場所を保存し観光資源として活用するために指定された区域）に認定された。公園は挑戦半島の形成過程だけではなく、様々な時代の岩石も観察できるので、優れた景観とともに学術的・教育的価値を持つ自然公園である。公園内の登山道の入り口では野鳥やタヌキにも出会えるそうである。才人の滝には、ジェインという綱を渡る芸人の悲しい物語も言い伝えられており、参加者はその言い伝えを聞きながら橋を渡り、橋からの滝の眺めの美しさに心を奪われた。熱い日差しにあたりながら、木々の下を歩く爽やかさが心地よく、自然の有り難さを肌で感じる訪問だった。

イ. 台風展望台（漣川臨津江生物圏保全地域と DMZ 訪問）

板門店の北東に位置する台風展望台は、軍事境界線 MDL に最も近い展望台で国土防衛の最前線にある展望台と言ってもよい。2人の兵士が同行し、展望台の中に入り映画館のように並んでいる座席に着席した。ガラス張りで、中から外はきれいに見渡すことができた。目の前に大型の模型があり、レーザーポイントで示してもらいながら、MDL や向かいの山、道やイムジン川、山頂の建物の説明があった。非武装地帯の話や、戦慄だった高地戦の話などがあった。望遠鏡が左右2カ所あり自由に覗くことができた。展望台の高さは264m 北朝鮮側に見える砦は315m 稜線や砦に続く道がはっきり見え、一見のどかな雰囲気さえした。

ウ. DMZ 百鶴文化活用所

百鶴文化活用所は、政府からの支援を受け、文化的な活性化を目的として作られ、展示会などが開かれている。ジオパーク内に住む様々な芸術家が農民と協力して作品を作っており、今回は「私たちはここで暮らしています」というテーマで作品が展示されていた。各作家の先生方からそれぞれの作品について直接説明を聞くことができた。どの作品も非常に精巧で美しく、魚などは今にも泳ぎだしそうな感じすらした。



ジオパーク



DMZ 百鶴文化活用所

7月20日（木）報告会・閉会式

訪問団は、自分に自信を持ってプログラムに取り組むことが大切だと考え、「1人の100歩よりも100人の1歩」をテーマにし、1人でも多くの先生が壇上で話せるようにというコンセプトのもと、報告会を準備した。はじめの発表者は高校訪問で案内係の生徒が日本語を流暢に話す姿に感動したということで韓国語でのスピーチに挑戦した。続く発表者は「日本全国の教員が集まってきたが、小さな円がつながり、広がり、韓国との懸け橋になりたい」と想いを述べた。ソウル文星小学校での文化授業については各学年担当グループから4名、ホームビジットについても4名、計8名の代表者が感想や感謝の意を述べた。報告会のまとめとして、「今回のプログラムには、私たち自分の価値観を見直す出会いや学びがたくさんあった。『私の変化が世界を変える』といった高校生との出逢いが印象的であり、今回の経験をもとに子どもたちが新しい価値観と出会う瞬間を作っていきたい」との語りがあった。最後に、プログラムの様子を編集した動画が上映された。映像を見る度にその場所での温度感や心の動きを思い出すことができた。充実した時間ほどあっという間に過ぎていくのだと改めて感じた。

その後開かれた閉会式においてはまずハン・ギョング 韓国ユネスコ国内委員会事務総長がその挨拶において、報告会での発表内容を受けて両国の教育・文化・人を理解する過程を通じて理解する「人の心の中にある平和の砦」がより強固なものになっていると感じると述べると共に、今後の両国の絆より一層花開くことを願った。

最後には根岸一成団長が関係者への感謝を伝えると共に、以下のような語りを添えて平和への誓いを立てた。

「(プログラムでの経験を通じて) 私たちは平和実現という、ユネスコの崇高な理念によって繋がっていたことに気付いた。私たちが韓国の地で教えられたことは、友好平和の実現の道のりははるか遠くにあるのではなく、自己意識を研ぎ澄ますことで、私たちの手の中にあることを教えてもらった。だからこそ、友好平和は自分一人で実現できるものではなく、人々が連帯することで強固なものになっていくものと信じている。」



報告をする参加者



閉会式での根岸団長

8月26日(土)・2024年1月27日(土)

振り返りミーティング(オンライン)

韓国での現地でのプログラムの終了後にオンライン形式で振り返りのミーティングを2回行った。1回目のミーティングでは現地での様々な経験に基づき、「韓国に対してのイメージがどのように変わったか」「文化的多様性や異文化を理解し、受け入れるにあたって重要なことはなにか」「プログラムを経験して生まれた新しい『問い』はなにか」などの問いについて参加者同士が共有をし合いながらゆっくりと振り返る機会を設けた。加えて今回の経験をどのようにして今後の教育実践に活かしていくかについても話し合った。2回目のミーティングにおいては現地でのプログラムから半年が経ち、プログラムの経験を活かした教育実践や参加者自身の変容について話し合った。児童・生徒・同僚・地域などの様々なアクターに対しての様々な実践が共有されると共に、今後の更なる国際交流活動の進展を目指す積極的な声が多く聞かれた。

参加者の声(プログラムを経験した後の自身の変容について)

- 職場で積極的に意見を伝えたり行動したりできるようになった。韓国の先生や児童の主体的な姿勢、日本人教職員に伝えようとする熱い思いに触れて、自分も発信していくことの大切さを学んだ。同時に、全国から集まった訪問団の先生方の主体的な姿勢にも感化された。これまで、組織の中で流れに乗って仕事をしていたが、必要なところは声をあげて、他の先生と話し合っただけで教育活動を進めるようになった。
- 研修に参加したことでの自分の変化は、とても簡単にまとめられるものではない。自分の人生を大きく変えた1週間だったと言える。人間として、教師としてのこれからの生き方、英語科教員としての使命を大きく見つめなおす機会となった。日本の子どもを外とつなげる、もっと外に目を向ける子どもを増やす、世界で起こっている紛争や問題を他人事ではなく自分たちにも関係あることとして捉えられる人を増やす、そしていつかは自分がその一手を担ってみたいと思う子どもを増やす。研修前から抱いていた、そういうことをしたいという気持ちがよりはっきりし、そのために何をしたらよいか、どんなことができるのかが具体的に見えてきた気がする。
- 私は韓国の教育にも大変刺激を受けたが、今回一緒に訪韓した日本の先生方にも大変刺激を受けた。プロジェクト中多くの先生方とコミュニケーションを取る機会があったが、みなさん海外に目を向けて仕事をしていて、子どもたちと世界をつなぐ役割を担っている先生方が多くいらした。一般の公立の小学生にとって海外を知る機会は少なく、興味を持っている子は少ない。しかし、これからの世の中を考えたときにグローバルな環境に慣れておくことは必要不可欠である。今回一緒に参加した先生方はそのような現状を打破するために、学校のプロジェクトとして海外へ生徒を連れて行ったり、放送で海外の文化を紹介したりするなど具体的な取組をしていて、大変勉強になった。

3. 成果と今後への活用

1 岩田 智文

(江南市立古知野南小学校教諭)



「あい」を感じた韓国訪問

「あい」と聞くと、どんなことを思い浮かべますか？私にとって今回のプログラムは、「あい」にあふれる時間を過ごすことができました。まずは、「愛」について。ホームビジットで「愛」を感じることができた。訪問先のお母さんは、英語が話せないが積極的に話しかけてくれた。常に気を遣っていただいたが、別れる際に「いつでも戻っておいで。いつ来てもいいんだよ」と言っていた。あふれる「愛」を感じた瞬間でした。次に「会い」について。かけがえない仲間と出会いがありました。出発前には出・会いの話をしていただき、それを実感する時間となりました。また、海を越え素敵な仲間と出会いました。この「会い」は、今後の活動でも活かしていこうと思っています。「合い」について。「話し合い」「認め合い」いろいろな「合い」を実践する時間がありました。みんなで一つの物を作り合わせる「合い」を感じました。報告会プレゼンはその「合い」の集大成だと思っています。最後に「I」について。Iメッセージはご存じでしょうか？高校生が、大人の前で夢について語ったり、南北の問題について語ったときの「私は～」のように「I」メッセージに感動しました。私も、目の前の子供たちに自信をもって、自分の意見を発信できるようにサポートしたいと感じました。

以上のように、私にとって今回のプログラムは「あい」を感じる時間となりました。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

校内では、韓国での教育のあり方で現場に取り入れられそうなものは積極的に取り入れていきたいと考えています。また、管内の小中学校で話をする機会をいただいているので、そこで今回の訪問プログラムで感じたことを語っていきたいと考えています。現在、小学校の先生と連絡を取り合っただけでプロジェクトを進めている最中なので、本校の英語科教員も巻き込みながら交流を続けていきたいと考えています。

●その他（地域コミュニティなど）において

私が所属しているマイクロソフトのコミュニティは全国規模であり、毎月オンラインミーティングがあります。そこで交流プロジェクトについて提案をしたり、意見交換をしたりして幅を広げていきたいです。また、プログラムで一緒になった先生方とこまめに連絡を取りながら継続的な活動をしていきたいです。

2 郡 守彦

(神戸市立義務教育学校八多学園主幹教諭)



新たな出発点：韓国訪問が引き寄せた新たな教育の地図

本プログラムは、私にとって新たな視点で自身の教育観を再定義する素晴らしい機会となった。韓国という近くて遠い国に実際に足を運び、その教育現場に触れ、深い学びを得ることができた。国際理解教育の重要性を強く感じ、特に韓国の教育現場で見た教師の姿勢や本格的な地球市民教育の実践は一国の視点に固執せず、多様な視点をもつことの大切さを認識させてくれた。

また、韓国について知るという経験は、私に新たな視界を開かせた。似て非なる部分や、日本との違いを直接見ることで、日本の教育状況を客観的に捉えなおすことができた。さらに、国内の教員との交流も貴重な経験でした。彼らとの深い議論を通じて自分自身の教育観を再構築するための多様なアイデアを得ることができた。本プログラムは、私の教師人生における新たなスタート地点となりました。「多様性を尊重し、常に新たな視点を求めていく。」これが私の教師としての新たな指針となった。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

本プログラムで得た学びや経験を以下の5つの手法で教育の向上を予定している。

- ① 外国語の授業における韓国との交流
- ② 国際理解に関する社会科授業
- ③ 国際理解教育に関する職員研修
- ④ 学校行事での文化交流
- ⑤ 本や映像教材を活用した図書館サービスの充実

児童生徒たちに対して、韓国についての理解を深める機会を提供し、グローバルな視野をもつことにつながる機会を増やしていきたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

学校以外にも自分が所属している地域コミュニティーで国際理解教育を広げていきたい。

3 米山 知里

(埼玉県立浦和第一女子高等学校教諭)



肌感覚で学んだこと

今回のプログラムに参加して、韓国について、教育について、そして国際交流の意義について、多角的な視点から知見を深められた。学校訪問や DMZ の見学は、教育の価値を考える機会となった。今後も恒久的な平和が守られるために教育が持つ可能性と、教育に携わる者としての責任の大きさを再実感した。私たちは偏見に惑わされることなく正しく過去を学び、現在世界に存在するあらゆる課題に向き合い続けていくことが必要であり、教員はまさにその先導に立っているのだと感じた。生徒たちの純粹かつ真摯な平和への想いをこれから先も途切れることなく世界へ伝えていかなければならないと強く自覚した。ホームビジットや懇談会などでは、国籍や年齢を超えた「人対人」の温かいコミュニケーションが出来たと感じている。異文化理解の為には、直接現地に赴き、表情や雰囲気を含め目の前の人が紡ぐ言葉を理解しようとする、ということがどんなに大切かを学んだ。コロナ禍で暫く失われていたものの貴重さが改めて身に沁みて感じられた。今回の日韓国際交流事業に参加出来たことは、今後の自分のキャリアに大きな影響を与えてくれるものだと確信している。今回広がった視野を持って、今後も目の前の一人一人の生徒たちの未来のために、より良い教育的支援を行っていききたい。このような貴重な経験と出会った全ての方々に心から感謝したいと思う。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・生徒、教員に向けた今回の国際交流の活動報告を行う。
- ・日本全国各地の先生方とのネットワークを今後も生かして情報交換を行っていききたい。
- ・学校訪問等で学んだ数々の有意義な取り組みを自身の日々の授業や生徒指導等に生かし実践する。
- ・先生方と協力し、勤務校の国際交流のプログラム内容を再検討する。
- ・管理職と相談し、オンライン交流会や韓国からの留学生受け入れなど、日韓の生徒同士の繋がりを構築していききたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・日韓関係の状況に今後も目を向けていく。
- ・日本での異文化交流の場に積極的に参加する。
- ・現地実施の国際交流事業に今後も参加していききたい。

4 加茂 篤思

(登米市立加賀野小学校教諭)



自分の価値観を変えるきっかけとなった研修

今回の研修を通して自分自身の価値観を変えることができた。具体的には、海外の教育現場を見ることができて自分の指導の中で続けるべきこと、また見直すべきことを再確認することができた。続けていくべきことについてはICT活用についてである。私はこれからの世の中で活躍していくためには読み書き同様ICTを活用することも必要不可欠だと考えている。韓国でも同じようにICT教育AI教育が行われていたので、世界的にそのような流れになっていることが実感できた。実際に見てきて韓国の方が進んでいる点もあったため、その水準に合わせて日本でも確実に取り組んでいくべきだと感じた。見直すべきことはさまざまな事象を世界規模で考えさせるということである。小学校では、地域の中で、日本の中で何をすべきかなどと考える機会はあるが、世界規模で子どもたちに考えさせる機会はそれほど多くないように感じる。それは日本の教師自身が世界のことを知らないというのも原因の一つだと考えられる。そのため、今回の研修をきっかけに教師自身も世界に目を向け、世界規模で物事を考えられる子どもを育てていきたいと考えた。こういった意味で自分の価値観を変えるきっかけとなった研修となった。この学びを今後の指導に生かしていきたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

日本でのSDGs教育で今回の研修で学んだことを生かせると考えた。私のこれまでのSDGs教育はどうしても教師主導となってしまう、子どもから問題や課題を引き出して調べさせる活動はできていなかった。そのため、主体的に取り組ませるための具体的な手立てはないかと振り返ったとき、今回の研修で訪問した文星小学校や文山水億高校のように「知る」「探究する」「生かす」などの段階を踏んで取り組ませるのは有効だと思った。また学校で新たにカリキュラムを組み立てるのは難しくても、私の現在の理科専科という立場では学年間のつながりを意識してカリキュラムを考えて指導していくことは可能であると考えた。そのためこれからの指導では、早い段階からSDGsとはどのような考えなのか知らせ、子どもたちから課題を立てられるように工夫して指導していきたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

本校では来年の1月に韓国の先生方をお招きして交流することになっている。その際に地域の方と交流する機会を取り入れてお互いの理解を深めたいと考えている。今回の研修で実際に現地の方々と交流することはとても大切であることを実感した。海外の方々と交流できる機会は少ないと思うので、これをきっかけに繋がりが持てると良いと思った。実際に交流してみると新しい発見があり、国は違えど共通点も多くあることに、私自身驚かされたことがたくさんあった。海外を知る良い機会となるので子どもたちだけでなく、地域の方々とも交流し互いの理解を深めたい。

5 河野 大樹

(大分県立大分上野丘高等学校教諭)



教員交流プログラムの本質的価値と参加者の責務

本プログラムへの参加は、私自身が何者でも無いことを痛感する良い経験となった。東アジア圏内で何が出来るのか、教員として何が出来るのか、自分の価値や使命とは何か、どれ一つ満足に達成していないと感じるとともに、もっと天井を高く設定し、成長したいと強く思った。

本プログラムに参加するだけでも価値観の変容、外的刺激の受容など意義深い。しかし、表層的理解に終始せず、本質的な国際理解・交流にするためには協働した活動が必要であるとも考える。例えば、実際に文化・自然保護に関する課題に対して韓日の教員が解決策を立案するハッカソンの企画も有益ではないだろうか。いずれにせよ、教員として学校に生徒にどれだけ影響を継続的に与えることができるかが、参加者の今後の責務であろう。成長の契機を与えてくれた韓日 ACCU の皆さん、学期末にも関わらず嫌な顔ひとつせず送り出してくれた所属校教職員の皆さん、団体行動は得意ではないが話してくれた参加者の皆さん本当にありがとうございました。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・職員会議（70名程度）において10分程度の還流報告を実施
- ・探究学習の中に異文化理解や諸外国の生徒同士のディスカッションの機会を計画
- ・授業実践やHRの中で自己の経験を授業にする

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・探究学習を学校内の閉じたものにせず、地域に生きる外国人や外国文化を持つ人々との異文化理解や、課題解決についてPBL型の探究学習を実践する

6 嶋田 拓哉

(千葉県立松戸国際高等学校教諭)



写真中央

私の転換点～教員として、人として～

今後どのような指針の下に教育に従事していきたいか。そのためにどのような専門性を高め、どう自身のキャリアを歩んでいきたいか。これまでの信条や価値観が一変した1週間であった。これまでは第2言語習得研究に関する知見を深め、より良い英語教育を展開し、「国際人」の育成の一旦を担うことを使命としていた。しかし今は、英語教育の枠を超え、探究する力の育成や世界市民教育、更には教育システム全体への関心が高まり、それに伴う専門知識を得ることや授業実践／交流に尽力することが今の私の軸となった。「国際人」育成の一旦に関わるのではなく、「世界市民」の育成を生徒と共に成長しながら実現するために、今動き始めている。この転換点ともいえる変化は、紛れもなく本プログラムで目にし、耳にした韓国におけるユネスコ活動からの学びによってもたらされたものである。それと同時に、「世界市民」の1人として成長していきたいと確固たる動機づけを得たのは、日韓問わず現地で関わった方々との対話のおかげである。今後の自身の在り方を一新し、その原動力までも与えてくれたこのプログラムと、そこで出会った仲間たちには心から感謝している。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

本校には、ユネスコ連絡会という組織があるので、その中で成果報告を行い、これまでのユネスコ活動をよりよくする協議を持ちたい。これまでは、「まずは知ること」「すぐに身近でできること」を教員主導で行ってきたが、そこから1歩進み、県内外の学校や、既存の国際交流を軸とした姉妹校との交流にまで、生徒の意見を重視しながらユネスコ活動の対象を広げていきたい。また千葉県にはESD部会があり、理事として働かせていただいているので、11月開催の教員研修会にて成果の報告とESD部会加盟校全体で連携しながら活動していくことの大切さに踏み込んで話をしたい。そうした校内外での議論を皮切りに、本校に留まらないユネスコ活動を同僚と考えていきたいと考えている。

●その他（地域コミュニティーなど）において

プログラム実施中に日本側参加者で帰国後に共にプロジェクトを実施することができるよう、プラットフォームが立ち上がった。まずはそのスタートとして、各校／地域の特徴や取り組みたい活動を共有し始めている。これを活用し、本校に実績のある国際交流の知見を生かした活動がともにできる学校を探し、協働していきたい。また、これとは別にすでに合同授業を行った経験のある韓国の学校と再度つながり、今回の経験を踏まえ、日韓の明るい未来をデザインするような合同授業を企画していきたい。

7 夏子 史和

(野洲市立中主小学校教諭)



『近くて近い国』になるために

今回、韓国を訪問し、様々な交流や体験・経験をさせていただいた。学校訪問では、文化授業などで児童生徒と一緒に活動し、その中で意見を交流し、子どもたちの思いに触れることができた。文化や環境は違えども、学びに対する意欲や興味は日本の子どもと大差はなく、日本との関係についても、未来志向で前向きに考えていることが印象的であった。ホームビジットでは、実際に家庭に訪問させていただき、互いの文化についての共通点や差異について学ぶことができた。DMZ 訪問では現状は停戦とはいえ、緊張感の高さを感じた。東アジアの平和について考える機会となった。日本と韓国は、不幸な歴史があったが、今回の訪問を通して、日本と韓国は文化的にも共通点が多く、東アジアの平和のためにも両国が協力していくことの必要性を感じた。距離は『近い国』だが、関係はよくなく意識的に『遠い国』だと言われることも多かった。ただ、今回ともに交流・活動することで心の距離が近づいたように感じた。大小を問わずこのような交流プログラムが両国でさかんに行われることで、両国民の意識を変えることができると感じた。真に『近くて近い国』になるために努力していきたい、と強く感じる機会となった。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・教職員への報告（発表会、紙面資料による報告）
- ・国際理解教育プログラムの開発・実施（交流会の実施）
- ・社会科（歴史分野）での教材開発
- ・在日外国人への差別問題についてのプラスイメージでの啓発に生かす
- ・ともに訪問した教職員と連携した実践

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・県・市国際協会のプログラムとの連携、参加
- ・国際理解に関する配布物の作成等

8 根岸 一成

宮城県加美農業高等学校校長



心からの歓迎と全幅の感謝から世界市民の自覚へ

新鮮な発見と学びに満ちた本交流プログラムに参加できたことは、かけがえのない体験となった。これは、企画運営面で入念なご準備をいただいた KNCU 及び ACCU 関係者のご尽力の賜物とあらためて感謝を申し上げたい。

さて、日本各地から集まった教職員 27 名は訪問団を結成し、韓国を公式に訪れた。その団長を私が仰せつかることとなった。その責任の重さをひしひしと感じるようになったのは、韓国の地に立ち、訪問の先々で私たち訪問団を心から歓待する、韓国の寛大な心に触れたからである。その緊張と感激を忘れることはない。思うに、私たちは「日本人」だから歓待された訳ではないだろう。植民地支配の歴史も含めて、日韓関係は決して平坦な時代ばかりではなかった。しかしながら、何人ではなく、ユネスコが掲げる平和実現の理念によって私たちが繋がったからこそ、同じ願いを持つ人間＝世界市民として理解し合えたのではないか。国境を越えた日韓の友情を人生の宝物として育てていくことが、心の平和の砦を強固にしていくものと信じる。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

まず本訪問の成果を校内教職員及び県教育委員会に報告し、日韓交流の促進の意義を訴えていきたい。その上で、来年 1 月には韓国教職員が本県および本校を訪れることとなる(注：2024 年 1 月実施済み)。この機会を絶好の国際交流のチャンスととらえ、韓国教職員の皆さんが、今回韓国で味わった感激以上の感動を届けられるように準備をしていきたいと考えている。

●その他（地域コミュニティーなど）において

特に今回訪問した文山寿徳高校とは、同じ高校ということで今後もつながりを保ちながら交流場面を生み出していきたいと考えている。

9 藤井 美香

上越市立東本町小学校教諭
(上越教育大学教職大学院)



新しい価値観との出会い

プログラムを通して「人と人のつながり」と「平和」について自分の価値観が大きく変化した。「人と人のつながり」について、ワークショップでのイ・ソンヨン先生の「文化とは、お互いに影響し合っこそ、多様で豊かになるということ伝えて」という言葉が心に残っている。人と人のつながりも、同じだと思った。違いで差別をするのではなく、違いを豊かさとして捉えることができたら、相手を理解することを楽しめると考える。今回のプログラムでは、様々な人とのつながりができ、自分の見方、考え方が更新された。この出会いを大切にしていく。

「平和」について、台風展望台からの景色を見ながら、知らないだけで「平和」というのは当たり前のことではないのだと思った。自分はどこか「平和」について他人事になっていた。まだ、自分のおもいをうまく言葉で表現できないのだが、「平和」はわたしたち一人一人の行動がつながっていくものだと思う。子どもも自分も「平和」と向き合う機会をつくっていききたい。

ムンサンスオク高校の生徒の言葉「私の変化が世界を変える」のように、この私の変化が、子どもの学びや新しい価値観との出会いとつながるように、これからも研鑽を積んでいきたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

・大学院生や所属校や学校支援で入らせていただいている教職員と児童に、今回のプログラムで学んだことを講義や授業で伝えていく。

※ゼミで報告したところ、多くの学生が興味をもって聞いてくれた。今後、今回のプログラムでの学びや気づきをいかし、「平和」について語り合うワークショップを作成し、ゼミで実践する。

・来年度、小学校現場に戻ったら、総合的な学習の時間の活動や人権教育、同和教育の中で韓国の児童との交流をする。相手を知ること、違いを楽しむということ、自分の当たり前を見直すことのきっかけづくりとする。

●その他（地域コミュニティーなど）において

・日本語支援の先生方の研修会の講師を依頼されることがある。その際、今回のプログラムで学んだこと、感じたことを話題に取り入れていく。

・11月に韓国で行われる韓国国際理解教育学会で、今回のプログラムと関連付けて、これまでの研究について発表することができるか検討中である。

10 小川 亮

(北九州市立門司中学校教諭)



教育は未来を切り開く鍵

私の住んでいる福岡県と韓国との距離は近く、古くから交流が盛んにおこなわれていました。メディアでは、連日のように「お隣の国」として韓国の文化や歴史、流行等について報道されており、日々、韓国の文化や歴史に触れることができます。しかし、実際に韓国に訪問して新たな発見が多くありました。

今回のプログラムで一番印象に残っているのは「韓国の方々の情熱と温かさ」です。様々な教育機関や施設を訪問しましたが、それぞれの訪問先で各分野の専門家の説明や思いを感じることができました。そして、韓国の方々の温かさを感じました。多くの質問にも笑顔で応えて下さり、「教育」を通して子ども達の未来を想う気持ちは世界共通であると感じました。今回、日本を代表する教師や関係者 30 名が参加しました。私は、この 30 人が個々の特性を生かし、連携することが今後の韓日交流を継続していく上で最も重要であると考えています。帰国したこれからが本番。「誰一人取り残さない」を目標に日本と韓国の教師が手を取り合い、子ども達の未来に向けて取り組んでいきたいと思っています。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

学校では、韓国紹介コーナーの作成、国際理解の学習の実施などに取り組みたいと思っています。子ども達より詳しく、より分かりやすく伝え、国際理解の心を育みたいと思っています。また、校内職員に対しては、報告会を実施することで、今後、学校全体で韓国との国際交流に取り組みたいと思っています。また、市内の国際交流モデルとして実践・交流に取り組み、国際交流の市内モデルとして、市内の小・中・高校へ国際理解・推進に取り組んでいきたいと思っています。

●その他（地域コミュニティーなど）において

本校には「門司港」が、古くからアジア各国との窓口として栄えてきました。現在は、観光地としてアジアからの観光客がとても多いです。その特性を生かしながら文化交流や共同プロジェクトに取り組みたいです。地域も巻き込みながら韓日交流を継続していきたいと思っています。

11 津曲 康夫

(宮崎県門川町立草川小学校指導教諭)



「日韓教職員対話プログラムでの学び～直接「対話」をすることの大切さ

私は、今回本プログラムに参加させていただき、たくさんのことを学びました。最も感じたことは、国を超えて、日韓の教職員が集い、日々の教育についての悩みや文化に関する取組の共有、環境や生態系の維持などの持続可能な取組、歴史などに関して直接会い、対話することの大切さです。例えば、韓国の先生方と実際に端午の節句に関する三角本づくりをワークショップ型で対話をしながら一緒に作成をすることで、お互いの国の文化の相違点について気付き、知らなかったことを新たに体験的に学ぶことができました。また、実際にホーム・ビジットでは、韓国の食文化や流行、日々の生活やハングル文字などについて、直接心を通わせ、互いに尋ねたり答えたりしながら学びました。私は、現在小学校3校の5・6年生の子どもたちに外国語科の授業を担当しています。本プログラムで学んだことを子どもたちに積極的に伝えながらも、対話することの大切さについていろいろな方法で気付かせていきたいと思います。

素晴らしい経験をさせていただきました、ACCUの皆様、文部科学省、在韓日本国大使館、韓国ユネスコ、韓国政府の皆様にご心から感謝申し上げます。カムサハムニダ。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

本プログラムで得られた学びや成果を以下のような点で活用したい。

- ① 2学期以降の外国語科（小学校5・6年の児童約330名）の授業の中で、韓国の食や生活、伝統文化などを英語で尋ねたり答えたりする時間を設定する。
- ② 本務校において、昼食時の校内放送を活用し、韓国で学んだことを全校児童に計画的・継続的に伝えていく活動を行う。

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ① 毎月保護者に発信している、外国語通信に「韓国コーナー」を新たに設定し、保護者や地域の方、教職員にも還元する。（宮崎県門川町立草川小学校の学校HPにも掲載予定）
- ② 自主オンライン研修会（自身が設立。現在全国で約155名の教職員が参加中）での紹介

12 都倉 さゆり

(神戸市立湊小学校教諭)



プログラムを終えて

今回の研修を通して、毎日が驚きと発見、感動の連続で、すべての経験が私の人生においてかけがえのない財産になりました。その中でも特に大きな成果が二つあります。

1つ目は、私にとって、韓国が「近くて近い国」になったことです。韓国の方々から心のこもった温かいおもてなしで歓迎していただきました。たくさん交流をしたホームビジット、学校訪問での子供達の笑顔、歓送迎会での歌やお話をした楽しいひと時、平和について考える時間などを通して、確実に心の距離が縮まりました。

2つ目は、全国から集まった先生方・職員の方に出会えたことです。みなさん多様なバックグラウンドを持っていて、年齢も校種も立場もバラバラで、普段の日本の学校での勤務では絶対会えなかった方々です。たくさんお話をすることで多くのことを学ばせていただきました。今後もこのご縁を大切にしていきたいと思えます。

本研修で学んだことを自分だけで終わらせずに、学校・職員そして子供達にしっかり還元していきたいです。最後になりましたが、プログラムに関わったすべての方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

【学校・教職員に対して】

- ・韓国の研修内容についての報告会
- ・パワーポイントの資料作成
- ・学校の実態に応じて、ユネスクスクール登録や国際交流活性化の打診

【児童に対して】

- ・韓国と日本の学校の違いを写真や教科書などを用いて伝える。
- ・国語や社会で韓国に関係する単元で子供達に学んだことを伝える。

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・地域の韓国人家庭の会のコミュニティーに積極的に参加する
- ・日韓に関するイベントに参加する

13 津嶋 大樹

(宮崎県立延岡高等学校教諭)



写真右

変化と成長

教師としての考え方や行動を 180 度変えてくれたのが、本プログラムです。プログラム参加前は、韓国に対して前向きな感情はなく、外国への興味やユネスコ活動への関心もあまり高いとは言えませんでした。しかし、実際に韓国の先生方と交流し、多くの人と関わる中で、韓国への印象は 180 度変わりました。今では交流を行いたいと強く思うだけでなく、生徒にもぜひ行ってほしいと思っています。また、ユネスコ活動や世界市民教育について知ることによって、その活動内容に感銘を受けました。生徒たちに伝え、そして日本中に広めたいという強い思いや使命感が芽生えました。本プログラムを通して、今まで自分が抱えていた諸外国への印象が大きく変わり、新しい教育観が芽生え、教師としての使命や意義を得ることができたと強く感じています。また、新しいことに挑戦し、学び続けることの大切さも感じられ、教師としての引き出しが何倍にも広がりました。改めて、本プログラムの素晴らしさに感謝しています。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

大きく 2 つの計画を立てています。

1 つ目は、英語の授業や LHR を利用しての世界市民及びユネスコ教育です。本プログラムでの自分自身の体験や学びを生徒たちに共有し、同時に生徒たち自身にも考えてもらいたいと思います。今後の世界を担う高校生の視野を少しでも広げられるような授業を行います。

2 つ目は、国際系や留学を考えている生徒への個別対応です。本校には、国際系学部への進学や留学を考えている生徒も多いため、そのような生徒を集め、様々なことを伝えたいと思います。また、生徒たちと議論するのも楽しそうだなと思います。

●その他（地域コミュニティーなど）において

大きく 2 つの計画を考えています。

1 つ目は、保護者向けの通信や本校のホームページを通して、今回の学びについて広く発信することです。生徒だけでなく保護者や地域の方にも本プログラムやその学びを知ってもらい、様々なことを考えるきっかけにもらえるとうれしいです。

2 つ目は、本校のオープンスクール等を通しての発表です。高校生だけでなく、地域の中学生に今回の体験や学びを伝えることは、延岡市にとっても有益だと考えています。この 2 つを実施できるよう努めます。

14 岡田 つぐみ

(千葉県立東葛飾中学校教諭)



たくさんのおもてなしに感謝

プログラムが終わった今、「5泊6日が、終わりではなく始まりの一步になることを記念しています」というパク先生の言葉がずっと頭にあります。人それぞれこのプログラムに興味を持ったキーワードは違うと思います。私の場合「交流」に強く惹かれ、「韓国」「ユネスコ」については不勉強のままの参加でした。しかし今では、韓国についてもっと知らなければならない、韓国語を学びたい、ユネスコについて勉強したい、という気持ちになっています。

(以下、報告会にて韓国語で行ったスピーチを日本語で書きます)

プログラムを通して、私たちはたくさんのおもてなしを頂きました。空港でのお出迎えから、講義、食事会、ホームビジット、学校訪問、DMZ 訪問など、あらゆる場面においてです。

おもてなしとは、やはり人、そして心です。

私の好きな歌の歌詞を一節紹介します。

「きっとこの世界の共通言語は 英語じゃなくて笑顔だと思う」

ホームビジットでエゴマの葉論争で笑い合ったことはよい思い出になっています。

韓国でたくさんの人から頂いたおもてなしを通して、笑顔という平和の砦を築くことができました。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

①授業

現地とのオンラインでの交流、英語の授業に韓国で得た学びを組み込む、

②環境

廊下に掲示物・韓国コーナーを作成し、興味を持ってもらう（作成・設置済み）

③報告会（生徒向け・教員向け）

韓国での研修で学んできたことをシェアする

●その他（地域コミュニティーなど）において

地域コミュニティーで活用する計画は今のところありません。

私の勤務校は、生徒が千葉県広域から通っているため、保護者や受験生が来校するタイミングで、プログラムで得た学びを見せることで少しずつではありますが輪が広がっていくと思うので、掲示物や授業内容に組み込めるようにする予定です。

15 坂井 琢雄

(新潟市立内野中学校教諭)



互いに共生できる隣国同士であるために～対話を通して～

歴史的な背景、経済的な状況、政治的な要素と両国間には様々な観点が複雑に絡み合う…と訪韓前はどこか頭の中でイメージしていた。訪韓後、このイメージが全て一掃されたわけではないが、非常に前向きに両国間の未来をイメージすることができている。訪韓前と後の違いとは何かといえば、「対話」がなされたという点である。現在に至るまでの両国間の教職員の交流、現地での学校訪問、質疑応答、韓国の文化紹介、南北分断の様子等、実際に目の前にして、言葉で交流する、対話の大切さというものを本当に強く感じることができるプログラムであった。両国の子どもたちが互いに手を取り合い、素敵な未来を構築していく為に、これからの対話の継続のために本プログラムで得た経験を伝えていくことに力を注ぎたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- 1 プログラムでの学び、体験談の紹介 (教職員向け 生徒向け)
- 2 社会科の授業内での活用
(地理「アジア州」 歴史「韓国併合」・「朝鮮戦争」 公民「国際社会の仕組み」)
- 3 総合的な学習 (PBL・ESD) での活用

●その他 (地域コミュニティーなど) において

自身とタイアップしながら教育活動を展開している近隣の大学生が主体となっている「国際理解教育ファシリテーション」の活動団体への提言、紹介

16 仁木 淳浩

(豊田市立美里中学校教諭)



笑う門には福来たる

笑顔は万国共通でした。韓国の生徒や先生方と交わした笑顔のあいさつが今も鮮明に思い出されます。今回のプログラムに参加したことは非常に貴重な経験になりました。韓国の教育理念に触れ、自分の教育に対する考え方や姿勢に新しいアイデアを得たり、改善すべき点に気づかされたりしたことがありました。韓国の小学校では、6年生に向けて福笑いを紹介する授業をしました。自国の文化や歴史について説明することで、韓国の生徒や先生方からも自分のことを理解され、文化の違いに対する理解と共有感を得られたことも大きな成果でした。学校、ジオパーク、DMZなど現地の施設を訪問したことで韓国の教育システムや文化、歴史に触れることができ、そこで学んだ事を日本の教育に活かしたいという思いが生まれました。研修を受けるたびに多様性を尊重する教育を実践するための様々な取組を学ぶことができました。今回のプログラムに参加できたことは私の人生の転機になったように感じます。韓国の先生とは主に英語で話しましたが、英語力の向上や異文化を理解しようと努力する姿勢など個人的にも大きな成長の機会となりました。この経験を今後の教育活動に活かしてよりよい実践を実現していきたいと思います。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・職員会議向け OJT の実施 (9月)
- ・全校集会における報告会の実施 (10月)
- ・職員室前の廊下や図書室への展示 (10月)
- ・総合的な学習の時間を利用し、SDG s についての勉強会を実施予定。
- ・SDG s に取り組んでいる企業とオンライン授業を実施予定 (10月～1月)

●その他 (地域コミュニティーなど) において

- ・大阪万博教育プログラムへの参加
SDG s に取り組んでいる企業とオンライン授業を実施予定 (10月～1月)
- ・豊田市国際交流委員会との交流
- ・障害者支援施設へのボランティア訪問
- ・郊外研修の検討

17 行場 二千佳

(登米市立佐沼小学校教諭)



ムグンファの心

「教育は万能ではない。」文星小学校校長先生の言葉を聞き、自分の取り組みについていつも見直し、子どもたちに向き合っていかなければならないと感じた。今回の授業実践やホームビジットなどのプログラムでは、今後の教員人生を大きく支えるかけがえのない経験をすることができた。携わっていただいた全ての方々に感謝している。出会った方々は一人一人情熱を持ち、輝いていた。私たちは離れていても同じ気持ちで現場に立っているということを実感した。この気持ちが今後の人生を支えるものとなる。「ムグンファ」の花言葉には「信念」という意味が込められている。よりよいものを子どもたちと共有し、明るい未来を切り開いていける力を育ていけるよう、信念を持って日々の授業実践を行っていきたい。人々が一緒に手と手を取り合い、微笑み合うことで平和が築かれていくのだと思う。互いの心にまかれた平和の種を、それぞれの場所で育て咲かせ、大切に守っていききたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・高学年の社会科の授業で活用したい。(歴史や農業、自然について)
- ・総合的な学習の時間では、他学校と児童と互いの文化について動画にまとめ紹介し合う活動をする
ことで、多様な文化を知るきっかけ作りになれば良いと考える。
- ・外国語専科と連携を図りながら、日本の食文化や地域のおすすめの紹介し合う活動を取り入れたい
と考える。
- ・写真やいただいたエコバッグやボトルを掲示して、興味関心を高めさせたい。
- ・高学年はSDGsについての学習の機会が多いため、話題に提示したい。
- ・校内研究で発表する予定である。

●その他(地域コミュニティーなど)において

- ・授業参観やPTA役員会等で発信できればと考えている。知る機会を提供できるように校長と相談
しながら進めていきたい。
- ・今まで一緒に勤めてきた先生方にも紹介し、啓発していきたい。実際に数名の先生が興味を持ち、
話を聞きたいという人がいる。
- ・今回韓国と一緒にいった津曲先生の紹介で英語研究会に参加した。そこで、今回のプログラムにつ
いて紹介されていたので、自分も今後参加する研修会等で発信していきたい。
- ・授業参観やPTA役員会等で発信できればと考えている。知る機会を提供できるように校長と相談
しながら進めていきたい。
- ・今まで一緒に勤めてきた先生方にも紹介し、啓発していきたい。実際に数名の先生が興味を持ち、
話を聞きたいという人がいる。
- ・今回韓国と一緒にいった津曲先生の紹介で英語研究会に参加した。そこで、今回のプログラムにつ
いて紹介されていたので、自分も今後参加する研修会等で発信していきたい。

18 富山 正美

(茨城県立並木中等教育学校教諭)



韓国派遣プログラムに参加して感じたこと

今回の訪韓は自分にとって、3回目でしたが、今回ほど「韓国」に圧倒され、魅力を感じ、日本人として韓国とのかかわり方を切実に考えさせられ、韓国と草の根から友好関係を築きたいと感じたことはありません。それは、ユネスコ理念に基づく充実したプログラムが与えてくれた恩恵であり、参加できたことを光栄に思います。

事前研修から始まり数々の記念すべきセレモニー、講義、ワークショップ、学校訪問、世界遺産などの散策、現地の食事など私たち日本人教員が最大限に学び経験し感動するイベントがスタッフの皆様のご尽力で用意されていました。

しかし、プログラムの内容以上に、それに関わる全ての人々との出会いが私にとって、最大の収穫です。プログラムを成功させるという意志、教育熱意、友好的な気持ちを持つ皆さんと時間を共有できたことは私の財産となりました。平和は人が作る、出会いを大切にする、目の前の人を愛することが初めの一步、ということを確認したプログラムでした。この経験を忘れず、平和のために今できる具体的な行動を始めたいと思います。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

勤務校で活用します。

現在の予定です。

① 韓国での経験について授業で紹介する。

今回のプログラムの授業用スライド、ワークシート（簡単なハングル語、授業の感想）を用意して20分程度で担当する中3生全4クラスで行う。

② 韓国の高校との交流会

1. 少人数の希望者をオンラインでつなぎ、全体、ブレイクアウトルームで交流してもらう。

【手順】1. 文山水億高校の校長または担当教諭、キム先生にメールで相談する。

2. 相手校も希望があれば、勤務校の3～5年生全員に希望者を募り、人数を確定する。

3. 確定した人数を連絡し、交流に適した人数の生徒を集めていただく。

4. 交流日時を決定する。

4. 双方で相手校の生徒に聞きたい質問を事前に交換し、それに対する答えや、スライドを準備する。
5. お互いの学校紹介のスライドを作成する。
6. 交流当日は、オンラインで参加生徒や教員の自己紹介、学校紹介スライドショーを行い、その後ブレイクアウトルームに分かれ、質問に答えるなど自由会話をを行う。
7. 画面上で記念撮影をする。

2. 相手校の担当者と相談し、双方で実施可能であれば、授業で相手高校生徒に絵葉書を書かせ、送り返事をもらう。またその逆を行う。

- 【手順】
1. 日本、またはつくば市の絵葉書とハングルとアイウエオ対応表を必要数準備する。
 2. 担当する授業、または総合的学習の時間（学年主任と相談）に学年の生徒（中3）にメッセージやイラストを書いてもらう。
 3. まとめて、校長か担当教諭に送る。授業やクラブで配布していただく。

③韓国語マラソン実施（10～3月）

（NHK ラジオ韓国語講座を活用：月～金放送で毎回 15 分の番組である。NHK ラジオの語学講座のアプリでいつでも聞ける。）

無理することを禁止し、緩いマラソンにして途中脱落、途中参加 OK とする。2～5年生で参加者を募り、各自で取り組む。やり方は生徒の希望に沿う 1 か月ごとにメールで報告会、3月に集合して座談会を行う。

④韓国修学旅行の提案

現在はベトナムに平和研修を行っているが、タイミングと状況を見て提案する。

●その他（地域コミュニティーなど）において

地域コミュニティーにおいては、自分が住む龍ヶ崎市企画課管轄の国際交流協会ジュニア会議（同協会内の複数の部会の一つの小中高生部門）の副部長をしています。そのため、今回のプログラムでの経験の話を部員にする予定です。また、本ジュニア会議においては、これまで、龍ヶ崎市在住の韓国人の方を招いての料理教室や、龍ヶ崎市にある流通経済大学院留学時に本協会員で、現在慶州市役所勤務のユンさん夫妻を講師に招いてのオンライン韓国語講座などの活動をしています。韓国研修旅行を予定していましたがこの夏は航空運賃高騰のため断念し、今後の実施に向けて詳細を計画中です。

龍ヶ崎市には海外に姉妹都市がなく、韓国の都市を姉妹都市第一号にできるよう、将来的に関係部署に働きかけるつもりです。姉妹都市関係は同等で相互に利する関係が必要だと思われるので、そのために必要な準備と学習をし、このプログラムでの交流を元に韓国の学校とのつながりを継続させながら進めたいと思います。

勤務校、つくば市においては多数の姉妹都市がありますが、韓国にはありません。中高生の交流を行っている国際都市推進課とは、今年度ドイツの姉妹都市との交流を持つ計画があるので、その際に、可能性について聞いてみたいと思います。

19 平澤 香織

(横浜市立東高等学校教諭)



「国際交流こそが最善の安全保障」

本プログラムに参加し、たくさんの気づきや考え方の変化がありました。ご一緒した先生方からも同様のお話を伺いました。当初韓国のみなさんと交流することに対し、正直なところ不安な気持ちもありました。実際に交流してみて、その不安は杞憂に過ぎなかったのですが、何が自分を不安にさせていたのかを考えてみると、「相互の深い理解こそが国際交流の真の目的…」というような少し偏った考え方をしていたかもしれないことに気づきました。毎日のプログラムを通して、国際交流はお互いの違いを認識することや他者を敬うことが何よりも大切なことなのだ実感しました。それは正に、「国際交流こそが最善の安全保障である」ということを体感する日々でした。本プログラムではこの様に様々な学びがありましたが、教師自身の学びや気づきが生徒と共に過ごす日々をより豊かなものにしていくと考えています。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

管理職を含む勤務校教職員、教育委員会事務局等において、本プログラムについて知っている人はほとんどいませんでした。参加の申し込みのきっかけや申し込み方法についても、教育委員会事務局の方から問い合わせをいただきました。そこでまずは、本プログラムがあることを周知していきたいと考えています。その上で、その学びや成果をお伝えしていきたいと考えています。現在は自己啓発休業中なので、勤務校へは報告書のような形で成果を全職員へ配布していかれたらと考えております。教育委員会事務局の方へは、個別に報告の機会（面談など）を計画中です。現在在籍している大学院では、院ゼミなどの場で報告する機会をいただく予定です。教員を目指す学生もいる学部ゼミにおいても発表の機会をいただけるよう相談しております。お世話になっている先生方（大学等）の中には、ACCU様と関わりの多い方もいらっしゃるので、学びや成果についてお伝えしていきたいと考えています。

●その他（地域コミュニティなど）において

自身には3人の子供がおり、保護者としてPTA活動や地域の活動に関わっております。そのような場において積極的に本プログラムについて発信しております。特に勤務校と次男の通う中学校がユネスコスクールであり、神奈川ユネスコスクールネットワークでも一緒に活動をしておりまして、韓国でのユネスコスクール訪問などについても情報を共有しています。韓国の学校とつながりたいという要望がありましたら、紹介していきたいと考えています。本プログラムでは韓国ユネスコのみなさまに大変お世話になりました。横浜市の教職員の中には、ユネスコスクール加盟校ではなくとも、日韓関係やユネスコ活動に興味・関心の深い先生方がいらっしゃいます。そのような教職員の方々に本プログラムで出会った関係者のみなさまをご紹介します。今夏は、横浜市立小学校において、長い間「世界平和のための児童による主体的な授業実践」を担われてきた先生と韓国ユネスコをつなぎ、今年韓国ユネスコを訪問する機会をいただきました。こうした日韓の草の根の交流が両国の親善に貢献すると考えております。

20 橋本 真里

(愛西市立立田北部小学校教諭)



未来へ、そして世界へ

「過去を覚えることに留めるのではなく、過去に基づいて新しい未来をつくるべき」

歴史教師のバク先生のこの言葉がとても印象に残っています。近年、日韓関係が良好になってきているように見えますが、真の友好関係を築くには、歴史的な問題など向き合うべき課題が残っています。今回、様々な地域への訪問やそこに携わる人々の話を通して、韓国の視点からの日本の捉え方や平和への願いを知ることができました。同時に、自分がいかに過去のことや日本のことだけを考えて行動しているかに気づかされました。日韓が友好的に関わる未来を作るために大切なのは、互いが違うことを前提に価値を共有することだと考えます。歴史的な背景・文化の違いや人々の考え方の違いは、その国らしさ・その人らしさです。それを認めることで相互理解を深めることができると思います。今回のような直接的な交流を通して視野を広げ、同じ「世界市民」としての視点で関わることで、日韓の友好関係の促進、ひいては世界平和の実現につながるのではないかと考えました。小学校の教師である私としては、韓国の小学校の実態が知れたこと、先生や児童と直に交流できたことが何よりの思い出となりました。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

1. 教職員に伝える

校内研修で学校の教職員に向けて、今回のプログラムで学んだことを伝えます。具体的には、ユネスコの活動について、韓国の視点で考える戦争と平和について、韓国の学校の様子の3つの項目で話をします。韓国で撮影した写真と動画を見せながら説明する予定です。

2. 児童に伝える・児童をつなぐ

6年生には、「国際社会における日本の役割」の単元の中で、1時間授業をします。具体的には、ユネスコ活動の説明、韓国の視点で考える戦争と平和についての2つの項目を話します。5年生には、ムンサン小学校の児童との交流を計画しています。児童に韓国の文化、韓国語、ムンサン小学校の様子を話し、手紙を書いて交流することを提案します。ムンサン小学校の児童に向けて、英語か韓国語でメッセージを書いて送付しようと考えています。

他の学年の先生には、私ができる授業内容（韓国の食べ物、韓国の町の様子、韓国語、韓国の小学校の様子）を提案し、担任の先生から求めがあったら授業を行います。授業時間も、15～45分と幅をもたせて提案し、気軽に聞けるように工夫します。

●その他（地域コミュニティなど）において

【茶道の習い事場で伝える】

私はホームビジットで着物を着て茶道の手前を披露したので、その時の様子を茶道の先生や生徒のみなさんに伝えようと思います。韓国のお茶文化については多くを聞けませんでした。韓国の伝統菓子や伝統衣装について話したいと思います。

21 皿海 優子

(神戸市立竜が台中学校教諭)



人生のターニングポイント

今回の研修に参加したことは確実に自分の人生のターニングポイントになった。これから私は仕事について、自分の生き方について、在り方について、今までとは違った視点で捉え直し、考え、もしかすると大きな方向転換をするかもしれない。この機会を準備して頂いた全ての方々、同行した全国の先生方に感謝の気持ちが溢れるほどである。自分は今までにいわゆる途上国と呼ばれる所で生活したこともあり、様々な国の人と関わったので、自分の国際感覚には正直疑問を持ったことがなかった。しかし教育者という立場で今回韓国に関わったとき、それまでの自分が持っているものとは全く異質の視点が必要だったことに気付いた。自分はまだ未熟だった。人間の成長には気が付きが欠かせない。今回の研修は、他では決して手に入れることのできない気付きを与えてくれた。心より感謝致します。そして必ず自分の責任を全うします。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

帰国後、出勤初日にすでに校長、教務部長と今後のことについて相談した。まず、市内のユネスコスクールを校長、自分、教務部長とともに訪問し、担当者に話を聞く予定である。これで管理職に理解してもらい、今後ユネスコスクール申請の方向で持っていきたい。申請が通ったあとの数年で自分はおそらく転勤することになるので、あいまいな取り組みをするより枠組みを作ったほうが良いと考え、率直にすべてを話し、理解してもらった。職員研修を増やすことに少しためらっていた校長に理解してもらい、無事9月に全員に向けて報告会を開くことを決めた。校内にも韓国訪問の展示コーナーを作ることも賛同してもらった。学年主任に相談して、自学年の生徒に対する報告会を一時間もらうことにした。また、自分の学年の生徒対象に、訪問団の先生の所属校の生徒、または韓国の生徒との交流を提案した。そして自分の自治体で転勤していくにあたり、ユネスコスクールを増やしていきたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

この研修に参加しなければあり得なかった出会いは韓国の方だけではない。日本の先生方や、何かあれば連絡を下さいと言って頂いた政府関係の方。そういった方々と繋がれたことを、その場限りにしてはあまりにももったいない。自分が持っていないノウハウを持つ方に知識を教えることに貪欲になり、これからの自分の取り組みと活動の幅を広げていきたい。遠慮をせず、できることを最大限に活かす。そして自分の勤務地で今までやったことの無い取り組みや、「例年通り」にはないアイデアも臆せず提案し、実践できるように周りの協力者を増やしていきながら、諦めない生き方をしたい。

22 大野 綾華

(八千代市立高津中学校教諭)



出会いと経験は財産

本プログラムに参加したことで、全国各地で勤務する先生方や韓国でお世話になった方々に出会えました。今回、私が特に強く感じたことは「人との繋がり」の大切さです。子どもの特性、抱える背景や課題は、学校ごと、都道府県ごと、国ごとに違いはあります。しかし「子どもたちの未来のために、我々教員には何ができるのか」と考える気持ちは全員同じでした。韓国の先生方や生徒たちとの対話や交流を通して、そのことについて改めて真剣に考え、国を超えてその想いをぶつけ合うことができました。また、訪問させていただいた汶山守億高校では、日本語や英語を堪能に話す姿、南北統一問題、日本とのこれからの関わりについてきちんと自分の意見を述べる生徒の姿に感銘を受けました。これらの経験は私にとっては大きな財産であり、子どもたちに還元する大きなチャンスだと考えます。改めて教員としての使命を再確認し、身が引き締まりました。このような機会をいただき感謝でいっぱい

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・職員へ向けて、プログラム参加後の報告会を実施
- ・韓国訪問校を参考に、自校のESD教育の活性化を図る
- ・生徒の国際交流、全国の学校との地域交流など

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・市の国際事業への参加、発信
- ・語学習得
- ・本プログラムで出会った方々との交流を続けていく

23 山本 希鈴

(認定 NPO 法人コクレオの森
箕面こどもの森学園教諭)



人との繋がりによって築かれる、平和の砦

「チョヌン ヤマモト キリン イムニダ」。たどたどしい韓国語を、温かい笑顔で受け止めてくれた韓国の皆さん。子どもたちのためにと、想いや悩みを共有し合った日本全国からの参加者の皆さん。講演や世界遺産訪問、DMZ 訪問などたくさんのプログラムがあり、それぞれに感じる事、考えることがあったが、私にとってこのプログラムで最も印象に残っているのは、人との繋がりだ。

住む場所も、文化も違う私たちが出会い、教育について、それぞれの文化について、未来の平和について語り合うその時間が何よりも充実していて、そこには何の壁もないような、そんな風にも感じられる出会いになった。私が心を開いて教育への想い、平和への想いを語る事ができたのは、対等な立場で話を聴いてくれた、このプログラムで出会った人々の温かさのおかげだろう。

一所に留まっていたのは決して出会うことのなかった人々との出会いに感謝し、これからも未来の平和のためにこの繋がりを持ち続けたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

○中学生への体験報告

本校中学部が秋に韓国へ研修旅行に行くため、韓国での買い物や交通についてなどの共有をする。韓国の小学校、高校との交流で得た学びの共有をする。

○テーマ学習「国際理解」

子どもたちの興味関心に合わせて韓国の児童生徒とオンラインなどでお互いの国の文化を共有する時間を取りたい。韓国について知りたいことなどを、子どもたち同士の交流で知ることのできる機会を作りたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

所属する法人（認定 NPO 法人コクレオの森）の Facebook などプログラムで得たこと、感じたことなどを共有する。

24 高崎 智里

(兵庫県立宝塚西高等学校教諭)



動詞としての「夢」を持って

まずもって訪問させていただいたすべての団体の方々に温かく受け入れていただいたことに、本当に感動し心からうれしく思いました。日本でもIT化や国際化が進み、コロナの時代を経て教育も大きく変わってきている。生徒指導の観点からも古い考え方や習慣から、うまくこの変化について行かなければならない。今回の韓国の訪問を通して至る所でたくさんの心に残る言葉をいただいた。「動詞としての夢を持って、どんな価値観を持つ人間になるか話し合しましょう」(ムンサンスオク高校)「歴史は自分の経験をもとに続いていくもの、アナログ時代の苦勞があったからこそのような出会いを形作れた。親しくなくても時間をかけて何をしたらよいのか実践していきましょう」(パク・ソング先生)「教育の質は教師を超えられない」(ハン・ギョング氏) 過去のことや現状を嘆くのではなく、友好な関係を築くためにはこれから何をしていくのかをお互いに考えて努力すること、前を向くことが大切であることを、すべてのプログラムからひしひしと感じられた。日本や北朝鮮との関係を質問され、堂々と自分の意見を述べる高校生、平日頃から考えていなければ、即答はできない。どこまでも続く山と川と畑ののどかな光景のDMZは、たくさんの人の悲しみや努力の上にこの静けさを維持していることなど、韓国の平和への教育と努力を実感できたことが大きな成果であった。「友好・平和は誰かに与えられるものではなく努力によって維持されるものだ」(山本 剛氏) 誰も教育や、将来進むべき道の明確な答えを持っていくわけではない。日韓友好の強い意志を持つこと、夢を実現させる強い意志を持つこと、どうすれば叶うか一緒に考え努力することを日々積み重ねていくしかない。その実践を目の当たりにした研修であった。日本の学校に帰って自分ができるところを少しでも実践していきたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

図書館の一角に今回の訪問の、コーナーを展示する

8/31 職員鍵の後、職員向けに今回のプロジェクトの内容と成果を職員向けに発表する

10月 3年国際教養コース(仏語選択者)に異文化理解として今回の訪問の内容を講義する

12月 1年国際教養コース(40人)に異文化理解として今回の訪問の内容を講義する

●その他(地域コミュニティーなど)において

市民の異文化交流コミュニティーで展示などを行いたい

25 片桐 庸至

(千葉県八千代市教育委員会主任主事)



価値観を揺さぶる出会い

本プログラムに参加する自分自身のテーマは「自分の価値観を疑う」であった。出逢う人、モノ、コト、すべてを受け止めて、考える機会としようと臨み、大変充実した時間を過ごすことができた。

あらゆるところに散りばめられていた韓国の皆様の「おもてなし」の心、折り鶴を真剣に折る子どもたちの表情、工事中であった世界遺産・宗廟正殿の屋根の木の香り、皆を幸せにする言葉「근말」等々、文字に起こすだけで胸が熱くなってくる。

私は、本プログラムを通じて、ユネスコ憲章の理念である「心の中に平和の砦を築く」の一步を歩み始めたところである。また、この機会をいただき、一生出逢うことがなかったかもしれない方々に出逢うことができた。このご縁を大切に、自分自身の人生を豊かに生きることはもちろん、子どもたちが国際社会において豊かに生きられるよう、力を尽くしていきたいと強く思う。今回のプログラムに関わってくださったすべての方々へ感謝を伝えたい。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

本市には ACCU プログラムに参加した者たちによる「八千代市訪韓職員の会」という集まりがある。そこで発表するとともに、今回の経験を基に、本市教育の重点目標の第一に掲げる「ESDの推進」に教育行政の担当者として臨みたい。

具体的には、本市が取り組む「ESD カフェ」と名付けた ESD 推進のためのコミュニティにおける企画・運営に参加したり、本市各校の ESD 推進について指導・支援する役割を担ったりすることをイメージしている。

●その他（地域コミュニティーなど）において

今回、訪問した日本教職員間の強い繋がりができようとしている。各々の所属する学校を紹介するリーフレットを作成し、今後プロジェクトを動かしていく基盤となっていくものとなる。本市の小・中・義務教育学校でも他校との交流を希望する学校について、人と人（子ども、教職員、担当者等）を繋いでいく役割を果たしていきたい。

26 前田 良隆

(大阪府教育庁指導主事)



日韓の歴史に関する理解について

大阪府の学校では、戦後における日韓の歴史的経緯により、在日韓国・朝鮮人の児童生徒が多数在籍してきた。当該の児童生徒に対する差別や偏見も根強くあったことから、差別解消やアイデンティティ確立のための取組みを大切にしてきた。そうした取組みが、その後増加してきた多様な国・地域につながりのある在日外国人の児童生徒への支援にもつながってきた。そのような背景を持つ学校を多く有する自治体で学校支援にあたる中、実際に韓国に行って自分の知らない様々なことを知って体験することが大切であると思い、プログラムに参加した。実際に韓国の学校や家庭、施設等を訪問して生徒や教職員、韓国ユネスコのスタッフの方々等と交流することを通じて、韓国の歴史や文化について触れ、考えることができた。特に歴史については、日韓の戦後における歩みを振り返り、まず自らがしっかり知ろうとすること、それが外国にルーツのあるなしに関わらず、府内すべての児童生徒の自己実現支援につながっていく、という思いを新たにした。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

大阪府教育庁では、令和4年度に「大阪府在日外国人施策に関する指針」が改正されたことを受け、令和5年度中に国際理解教育・在日外国人教育に関する指導の指針を更新する予定であり、現在その作業中である。今後、関係課・関係機関・学校等との調整を行いつつ完成をめざすが、その内容については、大阪府がこれまで取り組んできた在日韓国・朝鮮人児童生徒をはじめとする在日外国人教育に関わる実践を引き継ぎ、さらに発展させるためのものとなるようにすることを重視していく。本プログラムを通じて韓国における歴史や文化、学校教育の取組み等について実際に見聞きした貴重な体験を、早速指針更新の作業に生かそうとしているところであるが、今年度末までには完成した指針を学校現場や市町村教育委員会に周知することで、今後の本府教育行政、ひいては府内学校における人権尊重を基盤とした国際理解教育・多文化共生教育の推進に還元していく予定である。

●その他（地域コミュニティーなど）において

上記指針の更新について、在日韓国・朝鮮人に関わる人権団体や在日外国人児童生徒の教育支援に関わるNGO・NPO等の関係団体等に情報提供を行うなどして、国際理解教育・多文化共生教育に関わる大阪府の方針について共通理解を図るとともに、府内学校に在籍する在日外国人児童生徒の教育支援に向けた連携・協力を継続・発展させることにより、学校への指導助言・支援及びそれらを通じた関係児童生徒の自己実現支援を充実させていく。

27 勝馬 あずさ

(沖縄県立大平特別支援学校教諭)



異文化理解と自己成長

今回のプログラムに参加して、多くの気づきと刺激を受けた。特に以下の2点が大きな収穫となった。

まず、相手を理解しようとする姿勢が異文化理解にとって何よりも重要だと気づいた。韓国の教職員や学生と直接話す機会を持ったことで、共通言語としての英語を習得することは互いを理解しやすくする一方で、言葉の壁を超えるためには相手に対する真摯な関心は何より大切だと感じた。

次に、今後の教職員生活について考え直すきっかけとなった。単に知識を教えるだけでなく、そこに付加価値を与える意識を持っていることを目の当たりにし、これまでの自分の教育が狭く浅いと痛感した。どのような生徒を育成したいのかを常に問いかけながら、自己向上に努めたい。

また、今回の交流で得たつながりを大切に、絶やさないよう努力していきたいと強く感じた。このプログラムに参加できたことは、私の人生にとって非常に貴重な財産となった。

今後の活動予定

●学校や教育委員会において

- ・勤務校職員に対して、本プログラムでの印象的な出来事や気づき、韓国の教育事情などを写真や動画とともに共有する。
- ・生徒に対して、本プログラムで見聞きしたことを英語の授業において紹介する。ソウル文星小学校での授業実践で使用した福笑いや折り紙は勤務校の生徒が作成したもので、実際に韓国の小学生がそれらで遊んでいる写真を特に紹介すること、勤務校生徒からの質問動画に韓国で答えていただいた動画を紹介することを通して、間接的に生徒も文化交流できたという点を意識させる。
- ・訪韓団の学校と交流授業を行いたい。

●その他（地域コミュニティーなど）において

- ・具体的にどのように活用できるか、現段階では検討中。他の参加者の方の活用案を参考にさせていただきたい。

事業担当者コメント

約4年ぶりの対面形式でのプログラム実施への期待の高さの表れから過去最多の応募者となった今回のプログラムには教育や国際交流への強い熱意を持つ教職員27名が全国各地から参加をしました。

今回のプログラムにおいては韓国現地では期間を通じて1つのグループで活動をしたということもあり参加者同士の結びつきも非常に強く、まさに最終日の報告会において示された「1人の100歩よりも100人の1歩」という言葉の通り参加者1人1人自らが意識高く主体となってプログラムを作っていくという積極的な姿勢が非常に印象的でした。またプログラムが終了した後も参加者同士がネットワークを活用しながら、協働して更なる継続的な活動を作っていく姿を見て今回のプログラムでの出会い・経験が今後どのような発展をしていくかを運営団体として非常に期待しております。

また今回のプログラムのもう1つの特徴としては現地でのプログラムの事前と事後に初めてオンライン形式でのセッションを加えた点が挙げられます。セッションを通じてプログラム参加前から参加者同士のネットワーク構築やプログラム参加に際しての必要な意識の共有を行うことで参加者が現地においてより多くの気づきや学びを得るための事前の環境づくりを進めました。またプログラム後のフォローアップのセッションにおいては現地での学びを改めてじっくりと振り返ることや、現地での経験を各々の教育現場にどのように活かしたかを共有するなどを通じてプログラムの成果を一過性のものに終わらせずに持続的なものとする試みを行いました。

上記のようなこれまでとは違った形式の交流プログラムの運営を試みることで ACCU としてもポストパンデミック時代における新しい交流の形のヒントを得ることが出来ました。今後も引き続き時代や社会の様々な変化に応じながらも、「『出会い』を大切にする」という本事業の根本の部分大切にしながら教職員の国際交流の更なる機会を提供して参ります。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

杉戸卓磨



付録

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003年3月16日～20日	ソウル、慶州、釜山	11名
2004年6月13日～18日	ソウル、慶州、釜山	16名
2005年9月5日～13日	ソウル、慶州、釜山	24名
2006年6月11日～18日	ソウル、光州、釜山	25名
2007年6月10日～17日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29名
2008年8月19日～28日	ソウル、慶州、釜山	52名
2009年8月26日～9月4日	ソウル、統営、安東、釜山	53名
2010年8月25日～9月3日	ソウル、原州、清州、釜山	53名
2011年8月26日～9月4日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53名
2012年8月29日～9月7日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53名
2013年8月22日～8月29日	ソウル、清州、春川、原州	50名
2014年8月26日～9月1日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州	50名
2015年8月25日～8月31日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50名
2016年7月12日～7月18日	ソウル、慶尚北道、仁川、釜山	48名
2017年7月11日～7月17日	ソウル、忠清北道、大邱、仁川	49名
2018年7月10日～7月16日	ソウル、慶尚南道、蔚山広域市、釜山	49名
2019年7月9日～7月15日	ソウル、水原、仁川広域市、春川	50名
2020年10月11日～17日	オンライン	16名
2021年7月17日～10月16日	オンライン	20名
2022年7月16日～10月15日	オンライン	17名
2023年7月15日～7月21日	ソウル、京畿道(坡州市・漣川郡)	30名

計 798 名

※2003年度から2017年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018年度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

プログラムの様子

歓迎晩餐会



ソウル文星小学校への訪問



その他





文部科学省委託 令和 5 年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
韓国政府日本教職員招へいプログラム
(日韓教職員対話プログラム)

2024 年 3 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

©2023 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)

